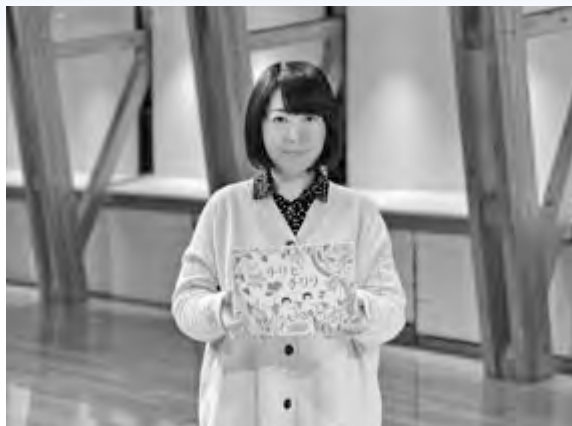


“絵本”へと紡ぐ、人から人への物語



本多 美紀 (ほんだ みき)

千葉県成田市出身。デザイン事務所、IT企業、アパレルメーカー等を経た後、グラフィックデザイナーとしてフリーランスに。2019年北海道東川町に移住。2020年8月絵本クリエイターとして剣淵町の地域おこし協力隊に着任。

【あこがれの地、北海道へ】

毎年夏に家族で北海道旅行をすること二十数年。親が登山とアウトドア好きなこともあり、いつもキャンプ道具を積んだ車で千葉県から北海道へと渡っていました。そんな親の影響もあってなのか、昔から大自然が好きで動植物に関心がありました。それに加えて父親は行く先々で絵を描く人だったので、自分も物心が付いたころから“画家”になりたいと言っていたのを記憶しています。小学生になって、“画家”に近い現実的な職業として“デザイナー”という職業を知り、目指すようになりました。

大学を出て、念願のデザイナー職に。グラフィックデザインの仕事をメインに、いくつか違う業界の職場を転々とした後、フリーランスとして活動していました。そんな中、自分は“ものづくり”全般に興味があったので、もっとクリエイティブ性の高いものを仕事にしていきたい。またそれとは別に、いつしか大自然に囲まれた所にアトリエを構えて、ひっそりと創作活動がしたいという漠然とした夢もありました。

北海道に移住するきっかけとなったのは、友人の依

頼で木工作品を制作したことです。そのときに立体物を扱う職人業に興味を湧きはじめ、そして思い出したのが夏に訪れた東川町にある工房でした。木工クラブ作品や、幼稚園や保育園にある可愛らしいデザインの木工家具やオブジェ等を制作している工房です。数年前から毎年訪れている東川町という町も魅力的だったので、移住したいと強く思い立ちます。冬になるころだったので周りからは反対されましたが、思い立ったその時に行動しなければ一生動かないだろうと、まず東川町役場に電話。そこで「移住前提で考えているならばむしろ冬を見ておくべき」とアドバイスももらい、直ぐに飛ぶことに。ダメもとで工房に頼み込んだところ、働けることになった上に、社宅にも住まわせてもらえ、まさかのとんとん拍子で2019年の冬、念願の北海道への移住が叶いました。

【協力隊との出会い、東川町から剣淵町へ】

東川町役場で電話を受けた方が「地域おこし協力隊」だったこともあり、そこで初めて協力隊の存在を知りました。当時の自分は協力隊ではなかったものの、東川町の協力隊の集まりに度々参加させてもらいました。全国各地から志を持って来ている方々の話を聞くのがとても面白く刺激的だったのと、一人で来た自分にとって心強い存在でした。

2020年に入り、世の中はコロナ禍へ。直接的ではなかったものの工房にも影響が出始め、自分も掛け持ちの仕事をどんどん増やしいろいろと厳しい状況に。本当にやりたかった創作活動をする余裕もなく、現状を変えなければと模索していたとき、剣淵町の求人を見つけました。協力隊の募集要項は全国的にもかなり異色な“絵本作家を志すクリエイター”というものでした。自分自身、数年前に絵本作家を目指していた時期があり、当時は諦めてしまったもののいつしか絵本を作りたいという思いがずっとあったので、これだ!と思いました。そして“絵本”で町おこしをするという他には無い特色に興味を湧き、応募を決めました。

剣淵町に辿り着くまでの経緯が長くなってしまいましたが、ここまでいろいろな方との出会いがあり剣淵町へとつながりました。



【絵本の里けんぶち、これまでの活動】

現在、剣淵町のシンボリックな施設である「絵本の館」を拠点に活動しています。絵本の館は、絵本を中心とした図書館で、子どもが遊べるスペースもあります。また、ホールでは展示会や講演会が行われ、喫茶店も併設している複合施設です。

年に一度300点を超える絵本の応募作品の中から、来館者の投票で大賞を決める「けんぶち絵本の里大賞」というイベントが行われています。2月に第31回の授賞式を予定していましたが、中止になりました。本来であれば、受賞作家さんや編集者さんが集まり、話が聞ける貴重な機会だったのでとても残念です。

このご時世イベントの多くはできずじまいですが、それでも絵本作家さんにご挨拶をさせていただく機会が度々ありました。この北海道の小さな町に、誰もが知っている作家さんが来てくださるといのは、これまで“絵本の里”として培ってきた歴史があるからこそで、剣淵町の力強さを感じました。絵本作家を志す自分にとって、これ以上ない有り難い環境です。

活動の本質である“絵本作り”に関しては、指導者がいるわけではなく、これをためせば絵本作家になれるという道筋がある世界でもないの、基本手探りです。自分の力不足で、まだ絵本としての作品を完成できていません。ジャンルも様々で、正解もない世界なので考えれば考えるほど難しい。葛藤の日々ですが、まずは自分が楽しめる作品でなければと、自身を見つめ直す良い機会にもなっていると、絵本もまた“ものづくり”の一環としてやりがいを感じています。

絵本以外の活動としましては、絵本の館の広報紙と

地方新聞「道北日報」にて、毎月記事を掲載させていただいています。また観光協会さんの協力の下、剣淵町のオリジナルグッズを少しずつ



剣淵町道の駅、絵本の館、旭川空港で販売中のガチャボン。別のシリーズや缶マグネットも展開しています

つ展開しています。

そして昨年末、協力隊の先輩方が経営しているカフェ&ゲストハウスの店舗にシャッターアートを描かせていただきました。雨雪だろうと毎日朝から晩まで作業をしていたところ、たくさんの方に声を掛けていただき、町民の温かさに触れる機会にもなりました。今回作業風景を見てもらえたことで町民への認知度が上がったのと、思いもしていなかった交流へとつながったので、より達成感がありました。有り難いことに他のところにも描いて欲しいという話があるので、今後も続けていきたいです。

【絵本と考える、これからの事】

何年も先のことはあまり考えが及んでいませんが、目前の限られた任期中にやりたいことは多々あります。まずは絵本を完成させること。自分ができることとして、それが一番の町おこしにつながるはずなので、越えなければならない壁は幾つもありますが納得のいく形にできるように努めます。他にも、絵を通じて交流を広げていく活動を積極的に行いたい。展示会の開催やオリジナルのグッズ展開など、町外の人たちにも剣淵町を知ってもらおうきっかけ作りや、町に興味を持った人たちが訪れた際に、楽しんでもらえるような“絵本の里”らしい町づくりの手伝いをしたいです。ただ一つ一つとても時間がかかることなので、どこまでできるかは分かりませんが、北海道まで来て実感したことは「自らが行動すれば、思っていた以上に世界が広がっていく」ということ。それには毎回、無い自信と勇気を奮い立たせなければならないのですが、ここまで来たという事実を糧にこれからも頑張れると思います。

町づくりもまた、大きなキャンバスでの“ものづくり”だと思えます。剣淵町が今後、どんな町になっていくのか楽しみです。



1階はカフェ、2階はゲストハウス。それぞれ協力隊の先輩方が経営しています。昨年12月シャッターアート完成